

# 女性医師・歯科医師 開業医会員アンケートまとめ

2015 年度実施



女性部

2016年7月

## 保団連女性医師・歯科医師開業医会員アンケートまとめ

全国保険医団体連合会 女性部

### 1. 調査の目的

厚生労働省の医師・歯科医師・薬剤師調査(2014年)では、2012年の前回調査に対する増減が、医科では男性1.8%増に対し、女性6.7%増、歯科では男性0.3%増、女性4.9%増と、女性の割合は年々増加しており、これからの医療を支える上で女性医師・歯科医師の役割は非常に重要になっている。

保団連女性部では、女性医師の労働環境改善が、女性医師のためだけでなく男性医師の労働環境を改善すると共に、安全な医療の提供につながり、ひいては医師以外のすべての働く女性の労働環境改善にもつながると考え、提言や国への要請などを行ってきた。

この間、育休・産休、院内保育所などの環境整備は、勤務医については一定の改善が見られたが、女性開業医については進んでいない。

そこで、女性医科・歯科開業医会員の働く環境や、悩み、要望、問題意識などの実態を調査し、働く環境の改善や、今後の協会活動につなげるため、アンケートを実施した。

### 2. 調査方法

- ①調査対象：各保険医協会・医会の開業女性会員
- ②対象者数：女性会員数 7463 (医科 4721、歯科 2742) 名 ※2011年調査  
→3割 2239名
- ③選出方法：各協会・医会ごとに対象会員の3割を無作為抽出 (一部は全女性会員に発送)
- ④調査期間：2015年7月～9月 (発送時期は協会による)  
※締切は9月30日としたが、2016年2月までに回収された調査票を有効として集計した。

### 3. 回収状況

- ①発送数：2956件 (46協会・医会)
- ②回収数：644件 (46協会・医会) /回収率：21.8%  
うち有効回答数：644件 /有効回答率：100.0%

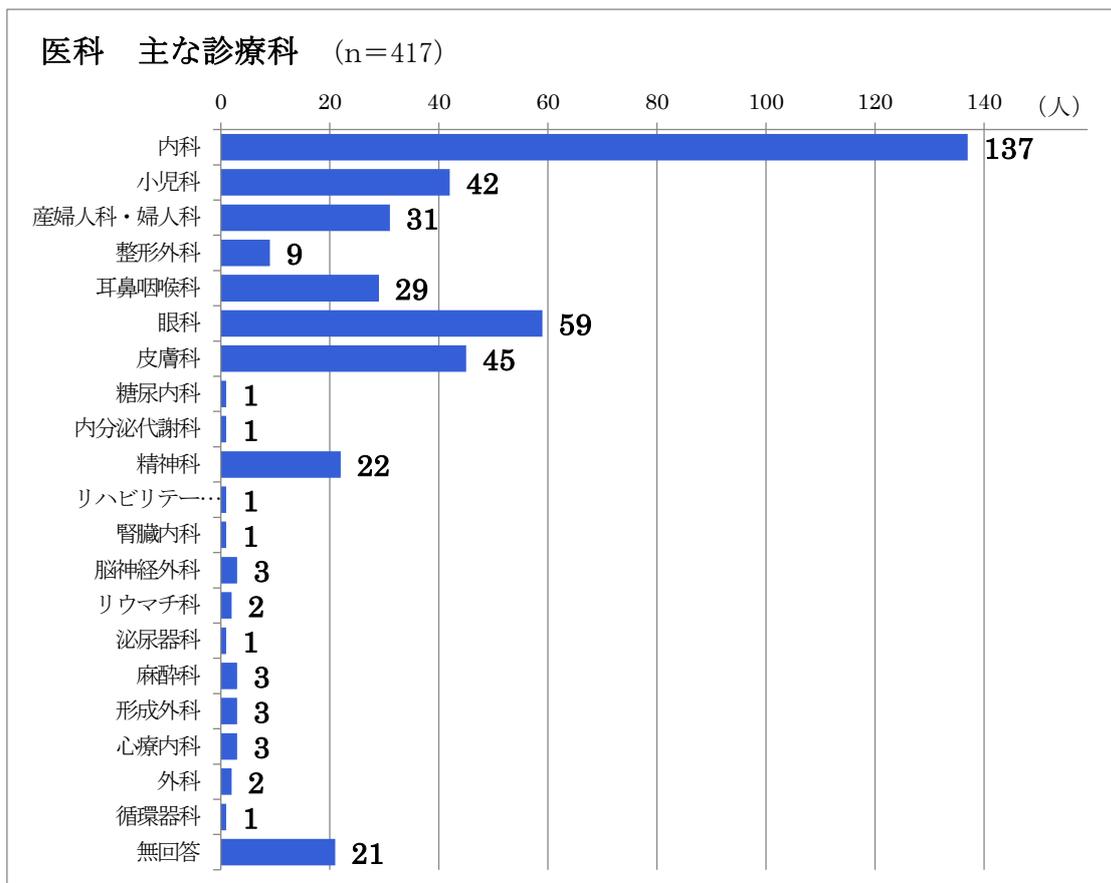
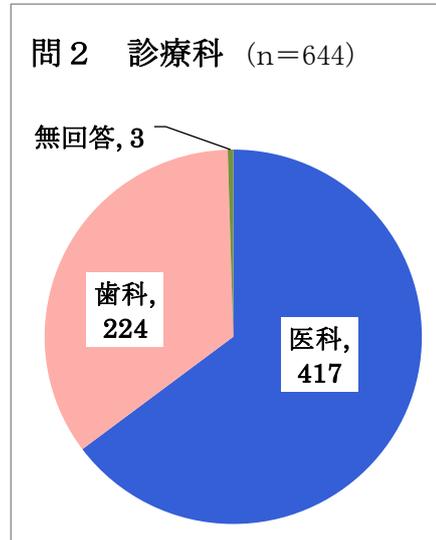
## 4. 集計

### 問2 診療科

回答者の診療科は、医科 417 人 (64.8%)、歯科 224 人 (34.8%)。

医科の主な診療科は、内科が 32.9% を占め、次いで眼科 14.1%、皮膚科 10.8%、小児科 10.1%、産婦人科・婦人科 7.4%、耳鼻咽喉科 7.0% となり、6 科で全体の 8 割を占める。

この傾向は厚労省の「2014 年医師・歯科医師・薬剤師調査」における女性医師の診療科でも概ね同じである。同調査に比べ、内科の割合がやや多く、麻酔科・放射線科・臨床研修医などが少ないのは開業医を対象としたアンケートであるためとみられる。

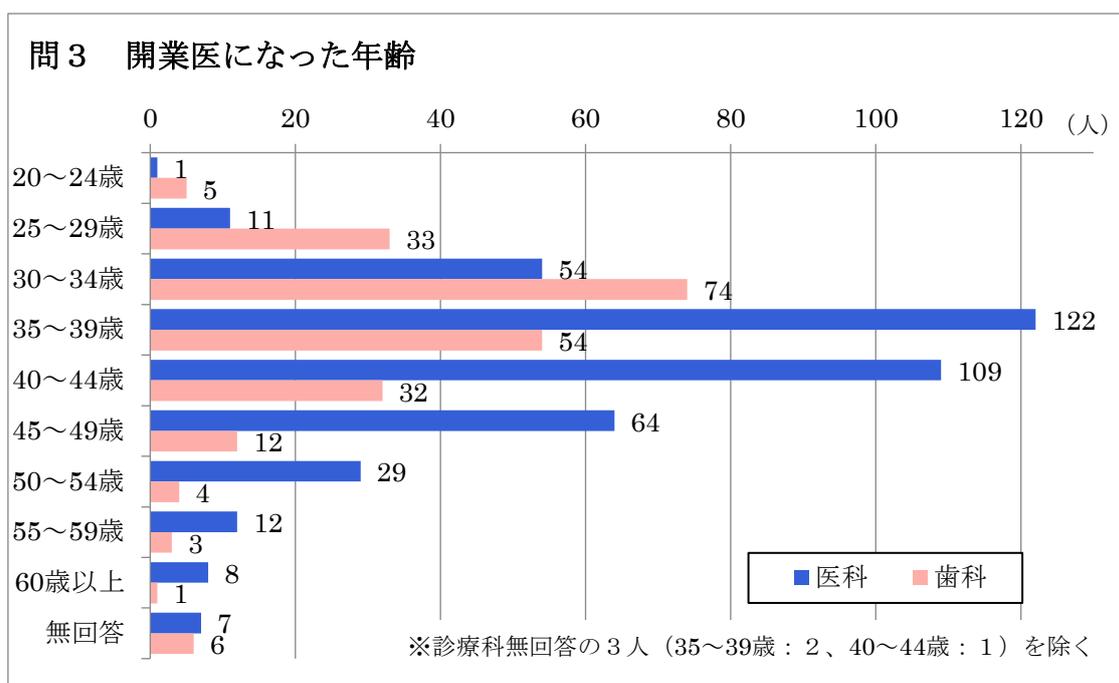


### 問3 現在の年齢および開業医になった年齢

現在の年齢は平均54.9歳(標準偏差10.2)。50歳代が4割で最も多く、45歳未満は16.0%。

開業医になった年齢は「35～39歳」が178件(27.6%)で最も多く、次いで「40～44歳」142件(22.0%)、「30～34歳」128件(19.9%)。医科歯科別に見ると、医科では「35～39歳」が122件(29.3%)で最も多く、「40～44歳」109件(26.1%)、「45～49歳」64件(15.3%)、「30～34歳」54件(12.9%)の順。歯科では「30～34歳」74件(33.0%)が最多で、「35～39歳」54件(24.1%)、「25～29歳」33件(14.7%)、「40～44歳」32件(14.3%)の順に多く、歯科の方が開業年齢が低い傾向がみられた。

医科歯科とも開業年齢のピークが出産年齢と重なり、自由記述では、「開業してしまうと、出産・育児が難しくなった」(歯科、37歳)、「開業医になってからの出産は経営リスクが高いと考え、2人出産してからの開業になった」(内科、40歳)、「子どもがなかなかできず、半ば諦めて開業した後、妊娠した。子どもが早くにできていたら勤務医をしていたと思う」(歯科、49歳)と、開業と出産の時期に悩む女性医師・歯科医師の様子が分かる。



### 問4 専門医・認定医の取得の有無と、今後の予定

専門医・認定医は64.3%(医科83.5%、歯科23.2%)が取得しており、取得していない人のうち1割は今後取得の予定が「あり」または「条件次第」と回答している。

自由記述では、「25歳くらいで医師になり、専門医取得が可能な年数に達するころは、ちょうど出産適齢期と重なる」(小児科、45歳)、「家族や親類の支援がなくても安心して働き続けられる環境整備が大切。保育施設も、休日・延長・病児保育などの対応が必要で、『子

供が熱を出したから休みます』では責任ある職種、役職にはつきません」(内科、73歳)、「短時間のパートで働いて、家族の面倒をみて、論文を書くことなど無理。男性も女性も短時間で働けて生活ができ、スキルアップできるシステムを希望します」(整形外科、52歳)など、キャリア形成の上でも負担が大きいことが分かる。

#### 問5 週平均の診療日数

週平均の診療日数は5~6日が9割を占める。

#### 問6 1日平均診療(標榜)時間

1日の平均診療時間は4~8時間が71.7%。8時間以上も25.9%(医科26.9%、歯科24.1%)に上る。※医科・歯科別の割合は診療科無回答の3件を除く。

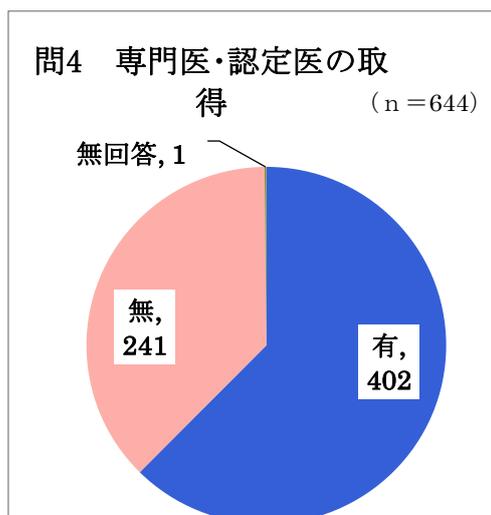
#### 問7、問8 関心事と悩み

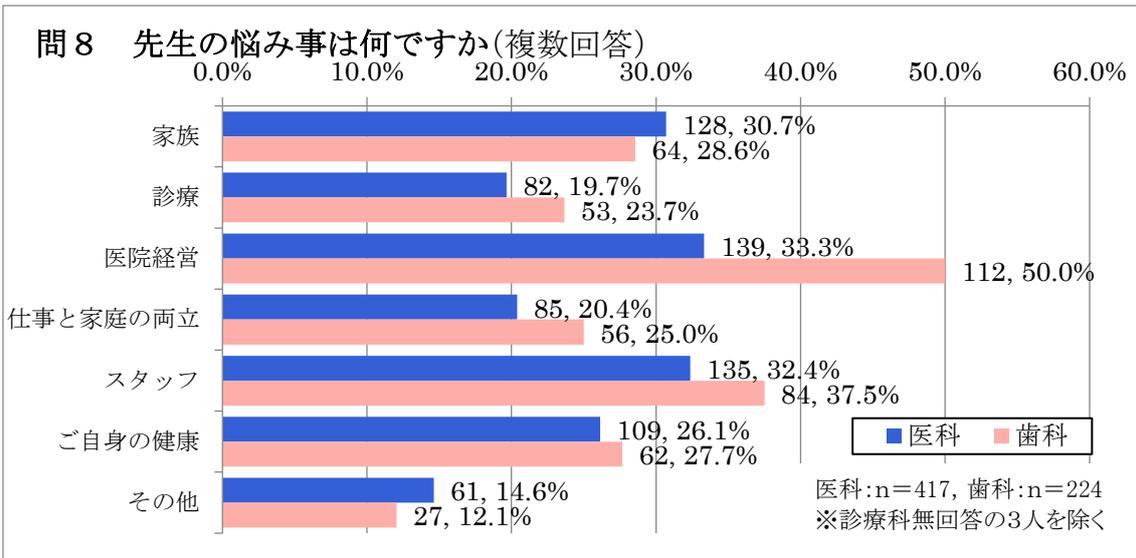
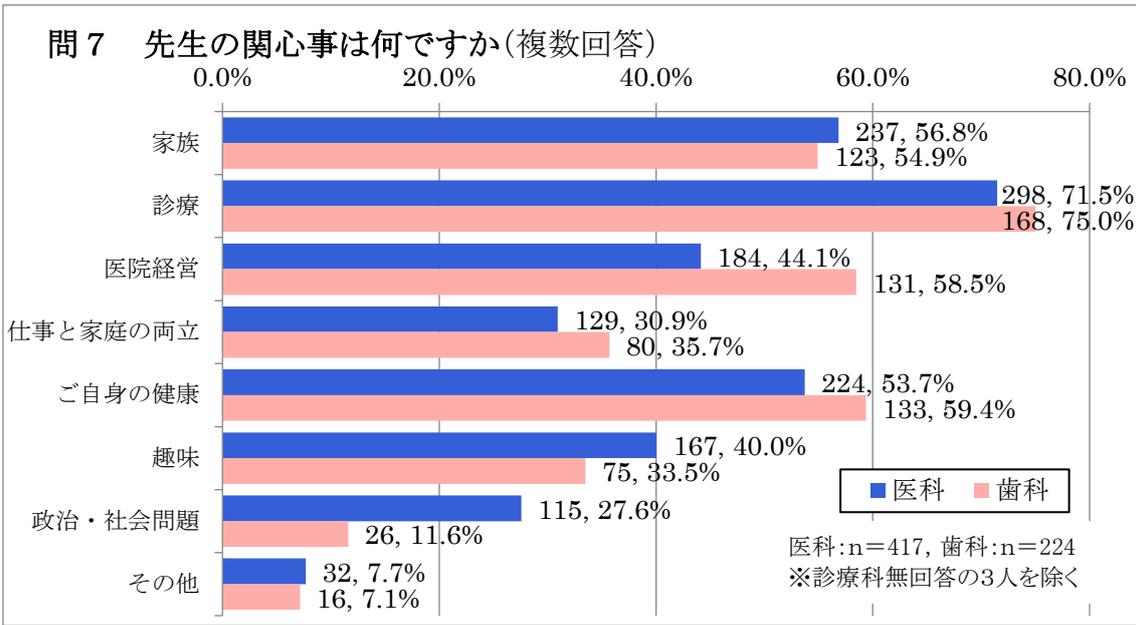
関心事(複数回答, n=644)は、「診療」72.8%、「家族」56.4%、「自身の健康」55.9%、「医院経営」49.4%の順に多かった。一方、悩み(複数回答, n=644)は「医院経営」が最も多く39.3%、次いで「スタッフ」34.3%、「家族」30.1%、「自身の健康」26.7%となった。※グラフは医科・歯科別(診療科無回答の3人を除く)

年齢別に見ると、すべての年代を通して「診療」への関心が高く、30代、40代では「医院経営」や「家族」が続き、半数以上が「仕事と家庭の両立」に関心を持っている。50代以上では「医院経営」や「仕事と家庭の両立」の割合が低くなり、「自身の健康」や「趣味」への関心が高くなった。

悩みについては、30代は「仕事と家庭の両立」が18件(50.0%)で最も多く、支援が必要なことが分かる。40代以上では「医院経営」や「スタッフ」、「自身の健康」などの割合が高くなった。

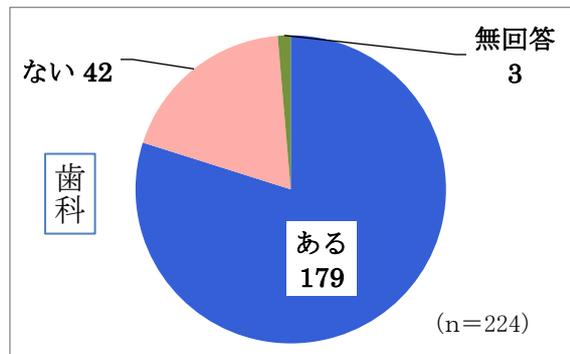
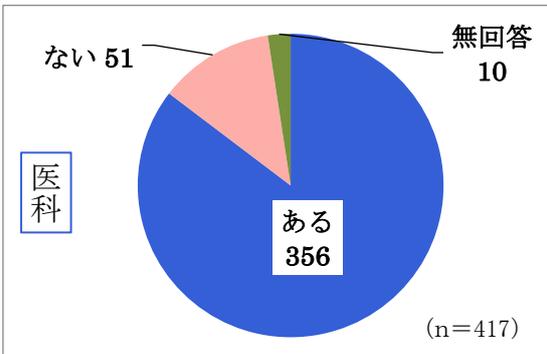
子どもの有無で見ると、子ども「有」は、「無」に比べて関心・悩みとも「家族」「仕事と家庭の両立」が7~25ポイント高く、「無」は「医院経営」「スタッフ」の割合が8~12ポイント高かった。





### 問9 リフレッシュ方法は

「ある」が83.5%で、読書や映画、スポーツ、旅行などが挙げられた。「ない」は14.4%。



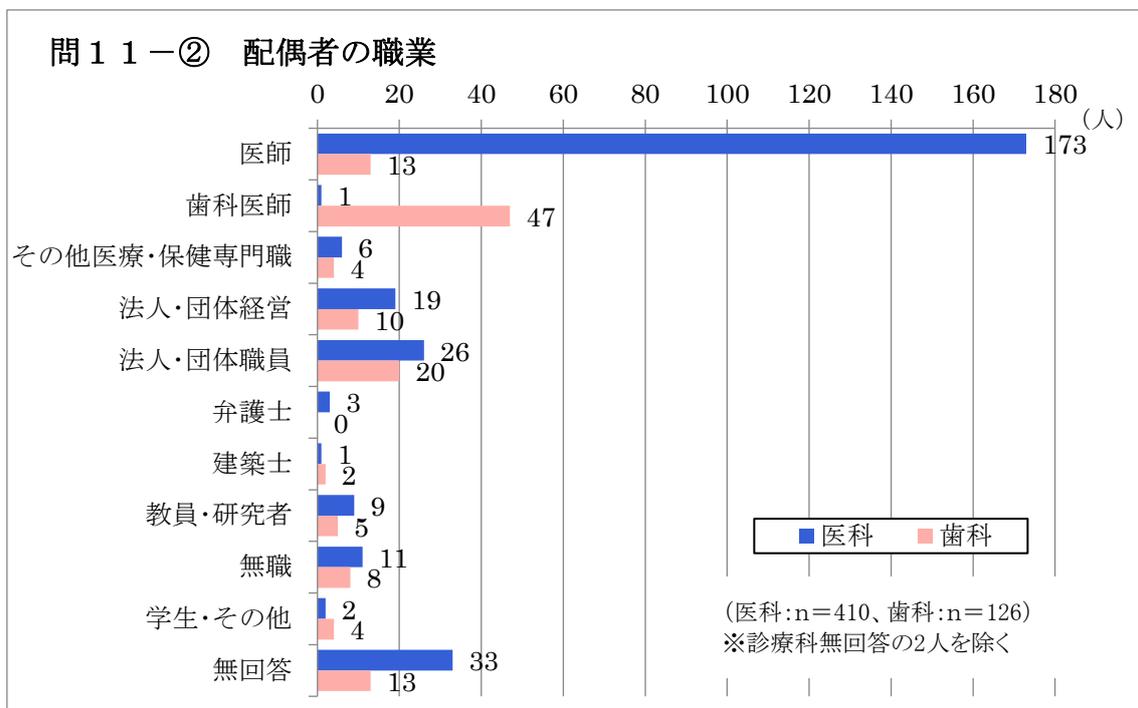
## 問10 協会・医会の行事や保団連活動について

協会・医会の行事や保団連活動で、知っている、または参加したことがあるもの（複数回答、n=644）は、「協会・医会主催の学習会・講演会」426件（66.1%）、「同新点数検討会」241件（37.4%）と、全回答者の4割～7割近くが認知・参加していた。

## 問11 家族について

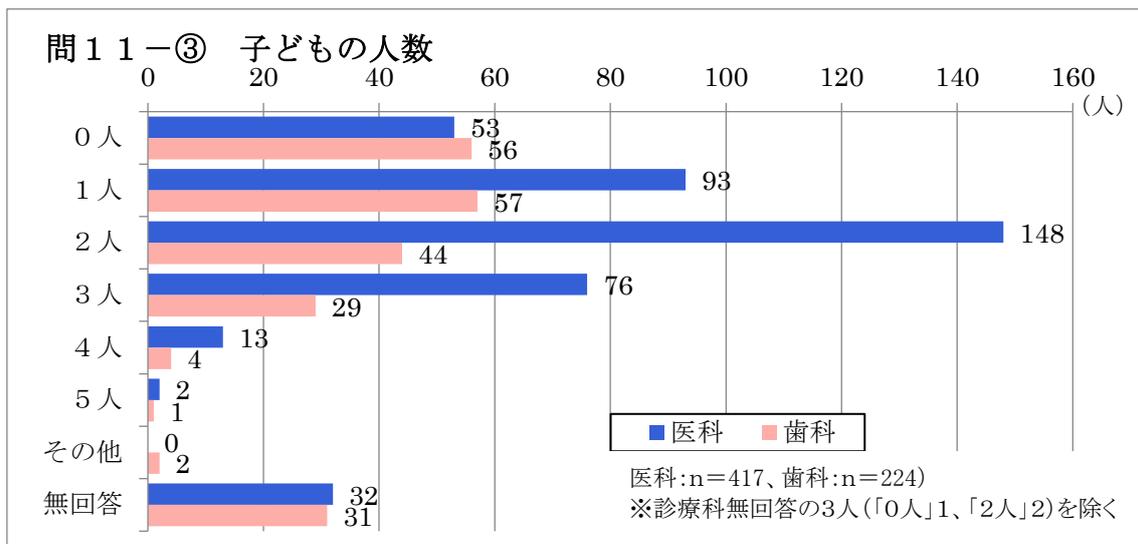
配偶者は「有」64.0%（n=644）で、うち配偶者の職業は「医師」45.1%、「歯科医師」11.9%と、合わせて半数以上を占め、医科では173件、歯科では47件が同業者だった。

※グラフは医科・歯科別（配偶者「有」のうち診療科無回答の2人を除く）



子どもの人数は「2人」194件（30.1%）、「1人」150件（23.3%）、「0人」110件（17.1%）、「3人」105件（16.3%）の順（n=644、無回答63件）。医科・歯科別に見ると、医科（n=417）では「2人」148件（35.5%）、「1人」93件（22.3%）、「3人」76件（18.2%）の順。歯科（n=224）は「1人」57件（25.4%）、「0人」25件（11.1%）、「2人」44件（19.6%）の順で、医科の方が子供の数が多い傾向が見られた。45歳未満では、医科は「2人」14件（31.8%）、「1人」13件（29.5%）、「0人」7件（15.9%）の順で、「3人」も5件あった。同歯科は「1人」16件（26.7%）、「0人」20件（33.3%）、「2人」8件（13.3%）の順だった。

介護を要する家族は「有」が145件（22.5%）だった。



## 問 12 産前・産後休暇と診療体制

開業後に出産ご経験した人は123人(「開業後1人目」回答者数)。

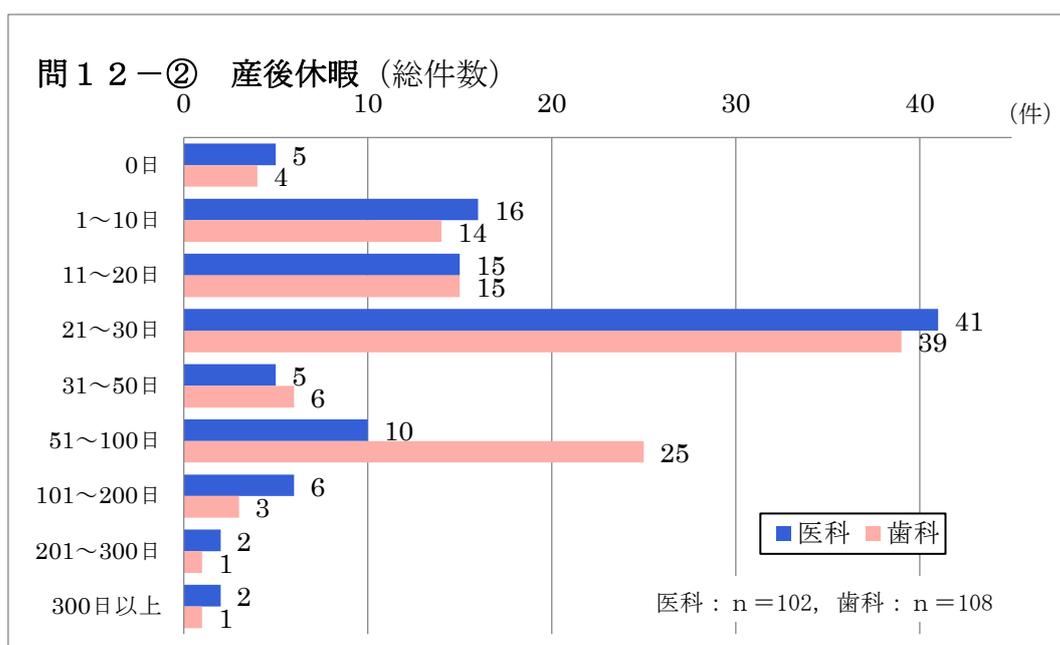
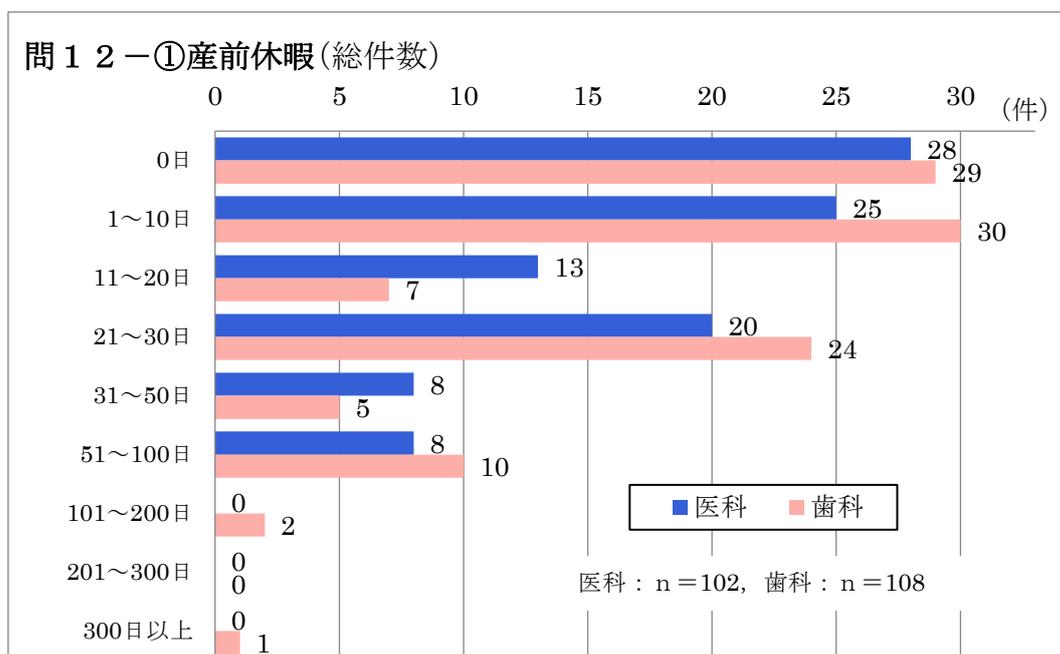
1～3人目の総件数で見ると、産前休暇は医科・歯科とも10日以下が半数以上に上り、医科では「0日」が最も多く28件(27.5%)。歯科は1～10日が30件(27.8%)で最多、「0日」も29件(26.9%)と並び、医科歯科とも厳しい状況が伺われる。

同産後休暇は「21～30日」が最も多く、医科41件(40.2%)、歯科39件(36.1%)。「0日」も計9件(医科5、歯科4)あった。このうち、1人目は「21～30日」47件(38.2%)が最も多く、「0日」6件(4.9%)を含め30日以内が64.3%に上る。2人目、3人目も同様の傾向が見られた。

労働基準法では、母体保護の観点から産後8週間は就業できないことになっており、産後6週間は本人が希望しても「就業させてはならない」と定められている。これは「母性保護に係る専門家会合報告書」(平成17年7月)において母体保護のために必要とされる期間で、従事する職業に関わらず、出産する女性全員に当てはまる。

厚労省依託調査「平成27年度仕事と家庭の両立支援に関する実態把握のための調査研究」によると、産前・産後休業の取得率は「女性・正社員」では77.1%、「女性・非正社員」は27.5%。また厚生労働省の平成26年度雇用均等基本調査では、在職中に出産した女性のうち86.6%が育児休業を取得しており、少なくとも産後8週間以上休んでいることになる。

これに対し、本アンケートでは、産後休暇30日以下が、医科77件(75.5%)、歯科72件(66.7%)、計149件(71.0%)に上った。

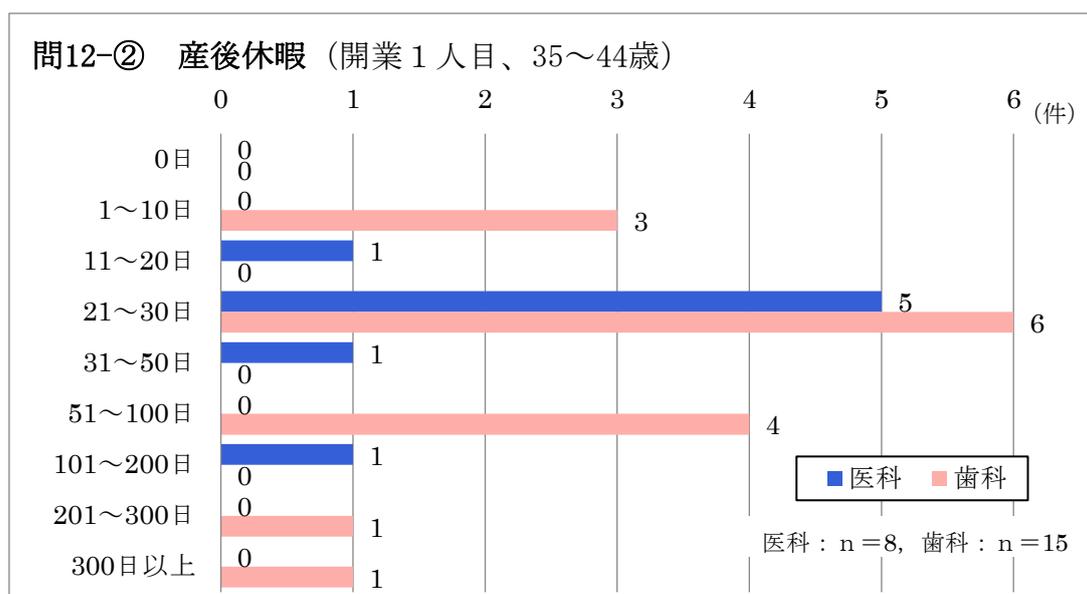
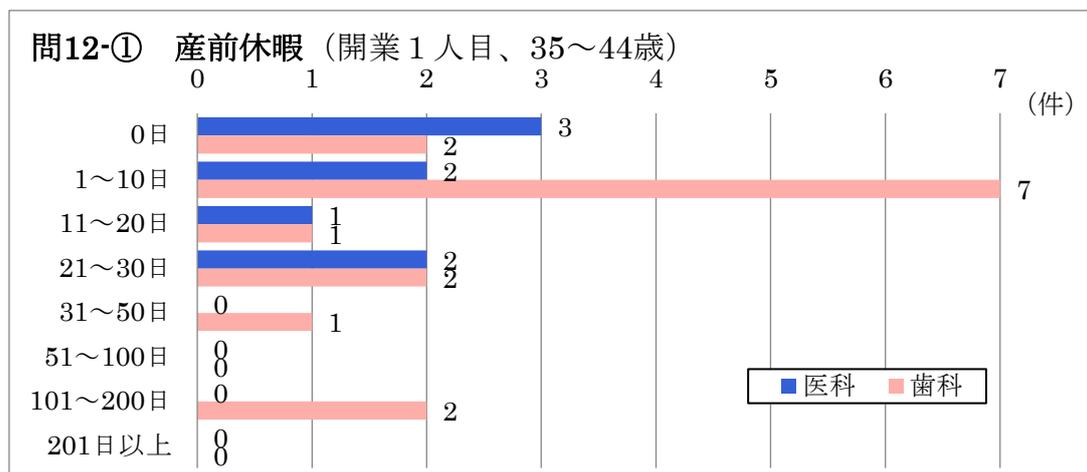


年齢別に見ると、出産年齢の35歳～44歳の1人目産前休暇は「0日」5件（医科3、歯科2）、「1～10日」が最多の9件（医科2、歯科7）。同産後休暇は「21～30日」11件（医科5、歯科6）が最多となり、女性開業医は今なお苛酷な状況に置かれていることが分かる。

開業後1人目の産前休暇は「0日」が31件（25.2%）に上り、「1～10日」の31件（25.2%）と合わせて半数を占める。2人目、3人目では「0日」が最も多く、1～3人目を合わせて57件（27.1%）と、約3割が出産直前まで診療していたことになる。

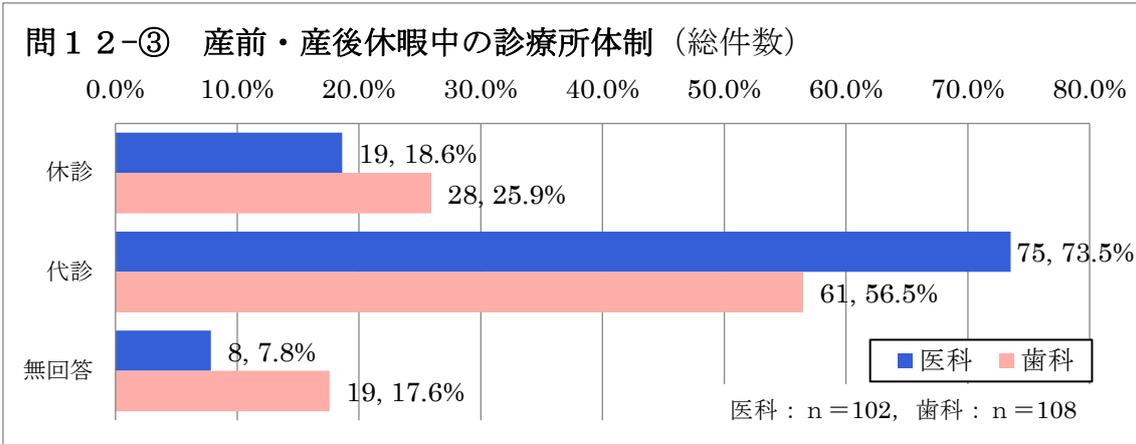
自由記述では、「現在妊娠3ヵ月ですが、代診が見つからず大変な思いをしています」（歯科、41歳）、「産前産後の休みが少なすぎたため体調を崩した。両親も近くにおらず、代診

を頼むのも金額が高いので、2人目が欲しいけど厳しいと思う」(内科、36歳)、「開業してすぐに妊娠が判明したため休めず、陣痛がくるまで診療した。経済的な理由もあり、産後子供をベビーシッターに預けてすぐに仕事を再開したため、体もつらかった。自営で公的な支援も受けられなかった」(内科、39歳)など、厳しい状況がつつられた。



産前・産後休暇中の診療体制は、開業後1～3人目とも6～7割が代診で対応し、総件数では「代診」が医科75件(73.5%)、歯科61件(56.5%)、「休診」は医科19件(18.6%)、歯科28件(25.9%)だった。

出産時に勤務医だった場合、非常勤やパートなどに勤務形態を変更したほか、中には「解雇された」(歯科、50歳)、「退職した」(小児科、50歳)、「復職をあきらめた」(小児科、49歳)というケースもあった。

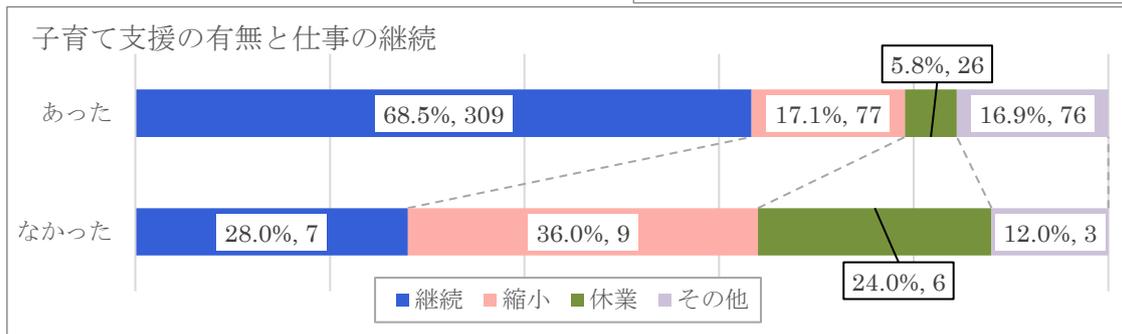
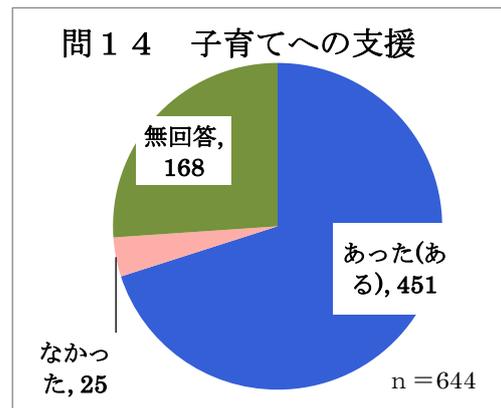


**問 13 子育て中の仕事 / 問 14 子育て支援**

子育ての際の仕事は、320 件が「子育て前と同様に続けた (続ける)」と回答し、「縮小」が 87 件、休業も 32 件あった。

子育てへの支援は 451 件が「あった (ある)」と回答。

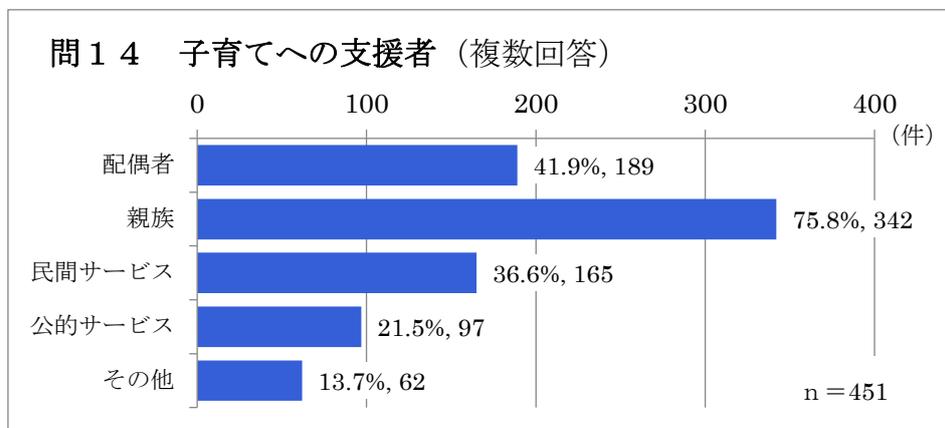
子育て支援の有無と仕事の継続を見ると、子育て支援が「あった (ある)」場合は「縮小」17.1%、「休業」6.3%にとどまっているのに対し、「なかった (ない)」場合は「縮小」36.0%、「休業」24.0%に上る。



子育てへの支援者 (複数回答) は親族が 342 件 (75.8%)、次いで配偶者 189 件 (41.9%)、民間サービス 165 件 (36.6%)、「公的サービス」97 件 (21.5%) となっており、保育園などの公的保育サービスが女性開業医のニーズに答えるものになっていないことが分かる。

自由記述では、「自営ということで公的支援を受けられなかった」(内科、39 歳)、「(公的) 保育園へなかなか入れず、環境の悪い保育園に預けざるを得ない状況が不安で、子供にわびる毎日だった」(歯科、52 歳)、「労働者側には産休等の様々な優遇があるのに、女性経営者

には配慮がない」(歯科、56歳)など、開業医であるために公的支援を受けられない苦勞がつづられた。必要な支援としては、病児・休日・延長保育の充実や、院内保育、代診等の仕組みと経済的支援を求める声が寄せられた。



また、男性や社会の意識改革、家庭内での役割分担の必要性を訴える声も多かった。「『女性が家事・育児・介護の主役である』という前提の下で議論しても、女性は苦惱から逃れられない」(耳鼻咽喉科、59歳)、「仕事の内容は男女同等になっていても、家事育児は女性のものという考え方は根強いために、女性が仕事と家庭で苦しむ場面が多いのではないか」(心療内科・54歳)、「男性医師も家事・育児に対して手伝いではなく当事者としてかかわることなしには女性医師が医師としてのキャリアを積むのは不可能だと思う」(内科・53歳・子ども2人)など、女性だけでなく男性も含めた働き方の改善が求められている。

### 問15 介護中の仕事

介護の際の仕事は「介護前と同様に続けた(続ける)」69.3%、「縮小した(する)」18.9%、「休業した(する)」5件(0.9%)だった。

### 問16 介護への支援

介護への支援は「あった(ある)」65.8%、「なかった(ない)」7.5%。支援者は「親族」「民間サービス」がともに半数以上を占め、次いで「公的サービス」33.5%、「配偶者」19.8%となった。

## 問 17 女性医師・歯科医師の働く環境改善のために先生の「思い・提案など」—自由記入

問 17 では、「働く環境改善のための先生の思い・提案」を自由に記入いただいた。全回答数 644 件中 332 件から記入いただいた。その内容を①具体的に必要な制度の提案など、②意識改革や家庭内での役割分担の必要性と、女性だけの問題にせず男性も含めた働き方を考えるべき、③女性だからこそその苦勞など、④診療と子育て（介護）の両立の経験談、⑤女性自身への要求など、⑥その他の 6 つに分類（複数分類あり）した。

### ①具体的に必要な制度の提案など、への回答 132 件

女性開業医会員が働く環境改善のために、具体的に必要な制度への提案を掲げた回答は、132 件、その内歯科は 32 件。その中で、

- ・ 出産後の子育て支援の充実が必要とご自分の経験もふまえての声が多く、公的保育園の充実、女性医師用の 24 時間の保育所など必要の声は 59 件。
- ・ 一番困ったのは病気の時、病時保育の充実の声は 42 件。
- ・ 一度開業してしまうと休むこともままならない、院長は休むことができない、休診してしまうと患者さんに申し訳ない、そのための「代診」システムの充実を、の声は 22 件。
- ・ 辞めずに家庭に入ることなく医師としての仕事を続けるために勤務時間の短縮が必要の声は 21 件。
- ・ 介護への不安と公的支援の充実を訴える声は 17 件。
- ・ ライフサイクル変化に応じて働く条件など多様化が許される社会であれば良い、医療者が自己犠牲的に頑張らなくて良いシステム、患者さんへの理解を求めることも、と社会や環境への要望の声は 16 件。
- ・ 事業主の出産育児休業制度を作してほしい、せめて産休期間のみでも手当てがあれば、開業医・勤務医ともに育児・介護で休職せざるを得ない時の収入の確保のための保険制度の充実の声は 15 件。
- ・ 復帰後のキャリア支援、トレーニングの場の必要の声は 6 件。
- ・ 開業医のノウハウなど壁なく話せる交換の場、コミュニティを作り、助け合う場、もっと多くの女性医師の生の声を集める手段の工夫などの声は 5 件。
- ・ 仕事と子育ての両立のために家事の代行サービスが気軽に依頼できたらいいは 5 件。

## 主な声

- 病児保育、保育園の充実、仕事の環境と収入の安定さ(小児科・51 歳)
- 事業主の出産育児休業制度を作って欲しい。せめて産休期間のみでも手当があれば代診が頼める。開業医への各種提出書類作成報告義務の繁雑さを軽減してほしい。(歯科・69 歳・子ども 3 人)
- 勤務医については労働時間を自由に選択できること、院内保育施設の完備 ②開業医・勤務医ともに育児・介護で休職せざるをえない時の収入の確保のための保険制度の充実を希望します。(内科・63 歳)
- 保育所の整備をして働きやすくしてほしい。子育てに対して、経済的な優遇・援助もないと子供を産み育てることはできません。一人の人間として成長するためにも、多くの患者さんと共感できるようになるためにも、子育ては経験してほしいです(男女とも)。(内科・55 歳・子ども 4 人)
- 開業してしまうと、出産、育児は難しくなりました。仕事もしたいが、子どもを預けるのもどうかと悩みます。一度仕事を離れてしまうとまた復帰するのが大変ではないか、私は代診があるので、病院をしめることなく続けられています。代診を見つけるのも大変だし本当に女性は大変だと思いました。診療所で仕事しながら、近くで子供もおいておいたら一番いいなと思いました。スタッフの子も一緒に診療所でみれたらいいと思っています。(歯科・37 歳・子ども 1 人)
- 子育ては平常支援、緊急時(患者さんの急病時、診察時間の延長時など)支援、特別時(学会出席など)支援など、きめ細かくあってほしい。介護についても同じです。(内科・69 歳・子ども 4 人)
- 現在妊娠 3 ヶ月ですが、代診が見つからず大変な思いをしています。女性開業医で、配偶者が同業でないと本当に大変なので、女性会員で助け合いなどあればいいと思っています。(歯科・41 歳・子ども 1 人)
- 女性医師の会等でサポートシステムを作れるといいですネ。(精神科・65 歳・子ども 1 人)
- 子育て時期には保育所探しや費用を公的機関がもってほしい。介護時期は支援サービスの斡旋やそういう機関がほしい。(精神科・50 歳・子ども 3 人)
- 子育ては当時の勤務先の院内保育園なくては成立しませんでした。とても恵まれました。今後発生するであろう介護にも、外部の支援を最大限利用して乗り切りたいと考えています。女性医師が安心して子育てができ、キャリアも積めるような社会になってほしいです。(精神科・53 歳・子ども 3 人)
- 女性が働き続ける為には保育所、学童保育の施設が必須であると思います。親や親類がいなくても、働き続ける意思があれば安心して働き続けられる環境整備が大切です。しかも保育施設にしても日祭日保育、時間延長保育、病児保育等の完備も。子供が熱出し

たから休みますでは責任ある職種、役職などにはつきません。こういう話をすると親がみなくて「かわいそう」等という方が少なからずいらっしゃいますが、上記施設がかわいそうならかわいそうでないように(子供が寂しくないように)施設の方をかえていくべきと思っています。(内科・73歳・子ども4人)

- 妊娠、出産は病気ではない扱いとなり、休診してもせっかく入っているにもかかわらず休業保障の保険がおりませんでした。少子化対策としてぜひ保険医協会では、せめて第一子は出産で休業しても保険がおりるようにしてほしい。(切迫流産で入院して安静にしていけないといけない時の休業時についても)(歯科・44歳・子ども1人)
- 出産、子育ては専属的な協力者がいないと仕事を続けることは難しい。親、配偶者に期待できなかったので、知り合いを探し、協力をお願いして可能となったのですが、費用面でも負担は大きかったです。紹介システムや援助システムがあれば助かるのではないのでしょうか。(小児科・57歳・子ども3人)
- 地域のネットワークを充実させるとうまくいくのかも。(歯科・41歳・子ども1人)

## **②意識改革や家庭内での役割分担の必要性と、女性だけの問題にせず男性も含めた働き方を考えるべき、への回答 73件**

女性開業医会員が働く環境改善のために、意識改革や家庭内での役割分担の必要性と併せて働く環境改善を女性だけの問題にせず男性も含めた働き方を考えるべき、との回答は、73件、その内歯科は17件。その中で、

- ・男性、配偶者、家族の意識改革を望む声は42件。
- ・女性だけの問題にせず、男性も含めた社会全体の意識変化、意識改革が重要との声は33件。
- ・職場の意識改革の必要性をマタハラの経験から訴える声は15件。

### **主な声**

- 女性が結婚・出産し、女性が家事・育児・介護の主役である」という前提の下で議論しても、女性は苦悩から逃れられない。「家事・育児・介護も男女平等に担う仕事」という社会の通念を作り上げ、社会制度全体を作り直す必要がある。(耳鼻咽喉科・59歳・子ども3人)
- もっと家族の協力を得れば縮小せずに続けられたという思いが強く残っています。(内科・48歳・子ども3人)
- 院内保育所の充実 男性医師や他職員、家族の理解、協力。(内科・41歳・子ども3人)
- 私は本当に恵まれていました。病院併設の保育園に2ヵ月から預けてフルタイムで復帰しました。開業後の幼稚園の送迎は夫(医院の経営者)にやってもらいました。小学校は児

童クラブに7時までみてもらい、夫か私が迎えに行きました。今では、夫が夕食を作って子供達に食べさせてくれます。①病院に保育所の併設を!! ②子育ても家事も女性だけで行うのではなく、男女平等に行うこと。男性はもっと家事や子育てをすべし。(内科・54歳・子ども2人)

- 男の理解が必要!!(内科・60歳・子ども3人)
- やはり、配偶者の理解と協力が大切だと思います。夫が私の仕事に敬意をはらってくれたことは、一生の恩と感じています。その分、私自身も夫の仕事への敬意が増し、良い意味での循環になっていると思いますが、皆ができることではないかもしれません。(整形外科・46歳・子ども2人)
- 一番大きいのは配偶者の支援(考え)で、それを補足する形で民間サービス、公的サービスがあると思います。社会全体(企業・政治家も含めて)の考え方が子育て支援に向かえば、各種サービスも増えるだろうし、男性の方の考え方も変わってくるのでは?(歯科・50歳・子ども2人)
- 教育の中で家事育児は夫婦(男女)が分担していくものだと伝えていく必要があると思う。仕事の内容は男女同等になっていても、家事育児は女性のものという考え方は根強いために、女性が仕事と家庭で苦しむ場面が多いのではないか。(心療内科・54歳・子ども2人)
- 日本(男性社会)を変えていけるのは女性の力!!! (精神科・66歳・子ども1人)
- 女性医師の働く環境改善には、男性医師の理解・協力が必要である。女性であることの権利を主張するばかりでなく、感謝の気持ちを忘れる事なく、ワーキングシェア出来る事を望んでいる。(内科・56歳)
- 男性医師の家庭を維持する際の意識改革が必要。女性医師の医師としての仕事を続ける思い、責任感が必要だと思う。男性医師も家事・育児に対して手伝いではなく当事者としてかかわることなしには女性医師が医師としてのキャリアを積むのは不可能だろうと思う。また女性医師もそれに甘えることなく、日々研鑽を積むことが必要である。(内科・53歳・子ども2人)
- 保育園の充実・介護保険のシステムの充実→これらがどんどん崩されていくようで心配です。社会全体として長時間労働にシフトしていくのをくいとめ余裕のある社会になってほしい。(歯科・69歳・子ども3人)
- いつまで働くのか、老後、どうするのかは男女共通の問題だと思います。資格が同等、仕事が同等であれば生活も同等がよいし、どなたかにフォローしていただいている時は自分もフォローするべきだと思って生活しています。(歯科・49歳)

- 女性医師のみではなく、男性医師も同様に環境を整えることと、意識改革が必要だと思います。クタクタに疲れては良い医療はできません。(婦人科・58歳・子ども1人)
- 女性の敵は女性ということにならないためにも、既婚子供ありの医師だけがケアされるのではなく、すべての医師の環境が改善されるのが望ましい。都内は所属のないフリー医師も多く、すぐに代診が見つからない。代診が見つかりやすくなると、結婚、子供を諦める女性医師が減ると思う。(眼科・49歳)
- 最近女性医師の働く環境に対しての改善についてのお話をよくお聞きします。もちろん、職場環境を改善する事は大事な事です。しかしながら一方で、医師として各々の患者様への責任があり、他の方ではどうしてもかわれない面もあるという特性を理解し、妊娠・出産を希望される女性自身も働く分野を考慮すべきだと思っています。女性のみならず医師全体の環境を見直すべきだと思います。(内科・50歳)
- 「女性」ではなく、医師の働く環境改善が必要かと思います。当直明けでふつうに1日勤務するのは労働者としておかしくないですか。娘が初期研修医ですが、勤務先の病院では回る科によっては1ヶ月全く休みがないところがあるらしいのですが、これもおかしくないですか。フランス革命前の農奴じゃないんだから、医師にも労働者としてまともな勤務環境を整えて頂きたいものです。(耳鼻咽喉科・55歳・子ども3人)

### ③女性だからこそその苦労など、への回答 32 件

女性開業医会員が働く環境改善のためにも実際に女性だからこそ様々な苦労をされている経験から改善の道を意識している回答が多い。32件、その内歯科は8件。その中で、

- ・妊娠・出産、仕事と家庭の両立に悩み苦労された声は19件。
- ・女性だからということでスキルアップできなかった悲痛な声は9件。
- ・産前産後の休みが取れず、体調を崩した、一人医師のため相談ができないので「うつ」になりそうなのに頑張ってる声は7件。

#### 主な声

- スタッフが女性のため、女性が女性を使うことの難しさがあった。(内科・59歳)
- 私は住み込みの家事手伝い他通いも2人程いましたので全く家事は行わず、ただ忙しく(仕事の方)子育てまで人任せにしてしまったことが後悔されます。院内に保育の場所を作り、子供を時々見ながら仕事をやれるのが女医としてはベストだと思います。家事は人任せでも良かったと思います。(眼科・78歳・子ども3人)
- 女性医師が他人より信頼を得るのは男性医師より大変です。短時間のパートで働いて、尚且つ家族もきちんと面倒みて、論文を書いてというのはそもそも無理なのでは。結局無

責任とか、女はダメと言われてしまいます。男性医師も女性医師も短時間で働けるシステム、生活ができ、スキルアップ出来るシステムができあがることを希望します。(整形外科・52歳)

- 開業してすぐに妊娠が判明したため休めず、陣痛がくるまで診療した。経済的な理由もあり、産後子供をベビーシッターに預けてすぐに仕事を再開したため、体もつらかった。自営で公的な支援もうけれなかったが、どうすればいいのかわからないまま、どうにかここまでできた。勤務医と同じようなセーフティネットがないと大変だと思います。(内科・39歳・子ども1人)
- 考えている余裕なく、ただ働いています。閉院してしまうと、自分の働き先がないので、父の後継者として続けています。体がひどいときも休めないのが一番つらいです。子供の学校のこともあって、これからは悩むのかな…。(医科・51歳・子ども1人)
- やらなければならないこと、やりたいことがありすぎて時間が足りず、睡眠時間をけずって体をこわしました。病院経営、スタッフの問題、患者さんのこと、子供に時間をとれないこと、etc 精神的にもストレスが大きく、ギリギリの所で常に日々をなんとか送っています。楽しいこと、やりがいもありますが。(内科精神内科・52歳・子ども2人)
- 開院してまさか妊娠できるとは思わなかった。産前後の産休が少なすぎたため、体調を崩した。代診の先生方に支払う金額が多い。2人目も欲しいが近くに両親がおらず、クリニックのこともあるので厳しいか…。(内科漢方内科・36歳・子ども1人)
- あまり女性の特性を強調したくないと思ってやっていました。女性だけの職場ならお互い様ですが、男性もいる職場では出産と育児と介護はハンディキャップになると思います。そのため自分の自由になる開業を選びましたが、第二子の出産は断念しました。(歯科・64歳・子ども1人)

#### **④診療と子育て(介護)の両立の経験談、への回答 54件**

女性開業医会員が診療と子育て(介護)の両立を様々な困難の中、経験されてきた内容から改善の道を意識している回答が多い。54件、その内歯科は17件。その中で、

- ・子育ての経験談の声は46件。
- ・親がいて良かった、親がいたから診療を続けられたとの声は13件。
- ・地域の方や、近所の方たちの協力があつたからとの声は10件。

#### **主な声**

- 本当に子育てと仕事を両立させたいければ、価値観を共有できる夫を選び、仕事内容も考えて選ぶ必要があると考えます。開業医は家にいる点で母親業がしやすく、子育て期間

には向いていると思いましたが(ただし、祖母の援助つきでしたが)。(糖尿内科・52歳・子ども2人)

- 開業医になってからの出産は経営リスクが高いと考え、2人出産してからの開業になりましたが、上手く出産と経営をやっていけるならもっと良いと思います。(内科・40歳・子ども2人)
- 子育てしながら、今まで通り働くためには、常にいてくれるナニーや、家政婦さんの方がいないと難しいと思います。18時くらいまで働いてそれから夕食の支度では、子供達はお腹がすいてしまうし、学校から帰ってきて、誰かの「おかえり」の言葉も必要です。よって現状では、仕事はセーブしなくてはいけない状況です。私の場合、仕事のため、実母のそばへ東京から引っ越してきました。(内科・43歳・子ども2人)
- 勤務医、開業医どちらの時期も家族との両立は常に綱渡りだった様に思います。実家の遠近や頼れるかの状況、子供の教、夫の職業、一人一人バックボーンが違っているので何をすれば両立がしやすくなるのか皆違ってくると思います。私は家と診療所が離れており、何かと不便に感じていますので、せめて開業する時は女性は絶対、診療所併用住宅がいいと思います。(歯科・56歳・子ども3人)
- 女性が歯科で開業した場合、普通の家庭を築くのは困難だと思います。経済的にゆとりがあれば別かもしれませんが、一人で診療をして家事をして子育てをするのは、子供が小さい間は特に大変でした。(母が手伝ってくれなかったら無理だったと思います。)自分の娘は絶対に歯科医師にさせたくないと思っています。(歯科・50歳・子ども1人)
- 私自身、子供がなかなか出来ず、半ば諦めて開業したため、その後子供が出来てもやめるわけにいかず、なんとか続けた。幸い子供も健康で、開業時の借金もすぐに返済できたので、今までなんとか続けてこれたが、生活のため(家族を養うとか)の仕事だったらかなり厳しいと思う。子供が早くに出来ていたら勤務医をしていたと思う。(歯科・49歳・子ども1人)
- 子どもを産み育てることで人間のスケールがどーんと大きくなり、親への感謝の気持ち、患者さんへの思いやりも増した気がする。ただ高額収入と思われがちな歯科医は保育園へなかなか入れず環境の悪い保育園に預けざるを得ない状況が毎日不安で子どもにわびる毎日だった。予約も入っていて休みずらく、小学生の娘に学校を休ませて子どもをみてもらおうかなどと考えてしまう有様だった。今は実家の片付けで休診日に通いクタクタでこっちが先にいきそうです。トホホ(笑)(歯科・52歳・子ども3人)

## ⑤女性自身への要求など、への回答 62件

女性開業医会員の医師・歯科医師としての思いの回答寄せられた。62件、そ

の内歯科は 20 件。その中で、

- ・ 医師・歯科医師としての姿勢のあり方、仕事への意思と責任への発言は 37 件。
- ・ 医師・歯科医師としてのモチベーションを保つための方法については 12 件。
- ・ 女性の問題にすることに抵抗感を感じずる発言は 9 件。
- ・ 感謝の気持ちを忘れてはいけない、それが大切 3 件。

### 主な声

- 開業した以上、患者様が来てくださる以上責任を持って仕事をしなければいけないので、人に任せてということができません。子育て、介護両方ありますが、色々な方の助けを借りながら、それを悩みと思わず子供のいるときを幸せと感じながら子育てしています。ただ子供や父や主人には迷惑をかけているかもしれませんが…。今の環境には不満はありません。(歯科・46 歳・子ども 1 人)
- 全てについてさがせばあるものです。一般的にとてもシブアーで困難ですが、話し合いと、民間サービスを十分活用すべきです。自分のライセンスのために、どれだけの税金と人のおかげを考えるべきです。子のためとか親のためとか自己満足で楽な道に逃げたいけません。(眼科・81 歳・子ども 3 人)
- 何があっても仕事はやめないという強い意志を持って育児等は親族、友達やベビーシッター等 普段から助けてもらう体制をとっておく事が必要だと思います。どんな職業でも育児をしながら立派に仕事をしている女性はたくさんいます。本人の自覚が一番大切だと思います。(眼科・68 歳・子ども 2 人)
- 環境を変えていく事は難しいことだと思います。いかにして自分がおかれた環境に適応していくか―が大切な事だと思います。他と比較せず、自分の長所・短所、得手・不得手を分析し、自分なりの方法でやり抜くしかないと思っています。(歯科・55 歳・子ども 1 人)
- 最近の女医は二極化している。仕事をフルに頑張っている女医と、効率の良いアルバイトと考えている若い女医さんたち。後者の関心事は医学的な点になく、女医の会に参加してもファッションやグルメの話ばかりで、呆れてしまい、参加する気がなくなった。女医の私からみても、とても認知できるものではなく、他業種の方と比較しても人格的に見劣りする。いくら医師不足でも支援する気になれない。(耳鼻咽喉科・子ども 1 人)
- 女性女性と言われ過ぎることに、抵抗感があります。(歯科・68 歳)
- 女性医師の働く環境改善には、男性医師の理解・協力が必要である。女性であることの権利を主張するばかりでなく、感謝の気持ちを忘れる事なく、ワーキングシェア出来る事を望んでいる。(内科・56 歳)

- 今の若い人には甘えがあると思う。もっと自分の使命(自分の家族へだけでなく)を果たす事に努力してほしい。真に仕事に喜びや意義を見出していたら、中途半端はできないはず。しんどければ開業すれば良いは違ふだろうと思う。中途半端で誤診もよく見かける。もっとしっかり働けるはず。真のやりがいを目指してほしい。今は保育園等も多くなっている。(医科・70歳・子ども2人)
- 税金を使って医者になっているのだから、働き続けるべきだと思います。働くのがあたり前の雰囲気作りが大事だと思います。(麻酔科・41歳・子ども2人)
- 女性だからといって甘えてはいけないと思います。両立は大変ですが、しっかり体制を整えればできると思います。(歯科・58歳・子ども2人)
- 若い後輩の医師(女性)やメディカル的女性スタッフが家族やプライベートを理由に休みや主張を堂々と遠慮なく言う人が多く、独身で上にいる自分が我慢することばかりで不公平さを感じます。(内科・36歳)

## ⑥その他は 37 件

女性開業医会員の医師・歯科医師としての思いとして上記に分類されない回答は 37 件、その内歯科は 19 件。その中で、

- ・ 家庭人でありながら医療人でありたい、などの希望の意見 16 件。
- ・ 自分の幸せを述べた回答や、一言言いたいのが 7 件。
- ・ 今の政権に一言が 5 件。

### 主な声

- 現在と違い、私達の子育て時代の職場環境は劣悪でしたが、今も尚、実際は介護、育児に直面すると困難を極める事態が多くあります。1つ1つ解決していくために運動していくことが大切と考えています。厚労省の男女共同参画事業、日医の女性医師、就業支援センター、県医師会女性医師部会も一步一步地道に前進するべく活動しています。是非タイアップ出来る所はして、上手に利用してくだされば事業の充実がはかれると思っています。(リュウマチ科・70歳・子ども3人)
- 研究や学会活動をバリバリやって学位をとって教授になりたい!と思う人と、私のようにパートでポチポチやって生活できたらいいわという者を一律に環境改善で語れないと思う。医師、医療者に限らず、自分に合ったライフワーク、仕事の仕方が選択出来るといいのと思う。今の平和な日本がどんどん格差が広がり、どこかの国のようになっていくのではという不安を感じている。(内科・53歳・子ども2人)
- アベ政権では「家での看取り」を期待している様ですが、そんなことされると40-50代の親の介護が必要な年代は働きません。消費はそのために必然、縮小していくので、経済的にはマイナスだと思います。「アホちゃうか」と言いたい。(産婦人科・58歳・子ども1人)

- 当時、保育所が十分でなく仕事を中断し、下の子が6歳になり、開業した。保育施設は増え、利用しやすくなってきているが、2人目、3人目の子供年齢差も仕事復帰の時間を要する。再教育を受けるシステムが出来ても、各医師それぞれに個々事情があろうから参加も難しいこともあろう。新専門医制度をみていると、女性医師の結婚・出産に水を差しているように思える。(耳鼻咽喉科・78歳・子ども2人)
- 歯科医師会の医療保障が産休は使えないのがすごく困りました。経営者なので、産休中に保険も出なくてイヤでした。(歯科・43歳・子ども2人)
- 女性を登用すると政府は言いながら、実際の現場には浸透していない事が多い。フレキシブルに働ける環境を経営者が考えるべきだと思います。(歯科・60歳・子ども2人)
- 女性に限らず男性も、学生時代から将来のビジョンを通して“ワークライフバランス”やそれに伴う“法律の労務”を充実して学べるカリキュラムがあってほしいと思います。そのことにより、今の社会制度に疑問を持つ、力が養われ、ひいては国の在り方にも関心を持つ人も増えるのではと思います。(歯科・59歳子ども1人)
- 若い女性医師の声をもっともっとうご紹介ください。私たちも聞くことで行動が変わります。子連れで講演会に参加され、託児所からたくさんの子供達の声が聞こえることを夢見ております。(内科・57歳・子ども1人)
- 歯科医は余っているので、主婦やっている人はそのままいて欲しいのが本音です。(歯科・52歳・子ども2人)

以上